

令和 6 年 5 月 23 日現在

機関番号：12102

研究種目：挑戦的研究（萌芽）

研究期間：2020～2023

課題番号：20K20809

研究課題名（和文）東欧における武道の教育力による国際開発

研究課題名（英文）Eastern Europe International Development through the Power of Budo Education

研究代表者

酒井 利信（Sakai, Toshinobu）

筑波大学・体育系・教授

研究者番号：40281711

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 4,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、東欧における武道の教育力に関するものであり、研究成果として特筆すべきは、日本における武道教育のロジックを整理し、これが東欧におけるユーゴスラビア紛争時の兵士が戦後陥った精神的障害を武道実践により克服した事例と共通性があり、東欧において武道教育が機能することを明らかにした点である。

更に、日本においては武道の精神性に芸道的・求道的精神性と倫理・道徳的精神性の二つがあり、現在はこれが同時に存在すると考えられているが、東欧の本事例においては、修行が進むにつれ前者の精神性について後者の精神性が顕現化するという順序、あるいは芸道的・求道的精神性の内容が深まり進化する過程が明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

海外において人間形成を担ってきたキリスト教の文化圏においてさえ武道による人間形成が可能であること、デカルト以来の心身二元論の世界においてもこの武道思想が機能していたことが明らかとなった点において、学術的新規性が非常に高い。

東欧の事例において修行が進むにつれ芸道的・求道的精神性について倫理・道徳的精神性が顕現化する、あるいは芸道的・求道的精神性の内容が深まり進化する様子は、敵と命のやり取りをした場面と時間的に近い立ち位置でこの過程・順序を追体験しているとも解され、ここには武道がそもそも殺傷性を目的とした戦いの術であったものが人間形成を目的とする教育へと深化していく過程を説明しうるものである。

研究成果の概要（英文）：This study focuses on the educational power of Budo in Eastern Europe.

Notably, the research results have organized the logic of Budo as education in Japan and found similarities with the case of soldier in the former Yugoslavia who overcame post-war mental health disorders through Budo practice, thus demonstrating the effectiveness of Budo as education in Eastern Europe.

Furthermore, in Japan, Budo has two types of spirituality: "artistic and seeking of a Way" and "ethical and moral." It is currently believed that these two types coexist. However, in the case of Eastern Europe presented in this study, it has been revealed that the spirituality of the former follows the latter as training progresses, or that the content of the artistic and seeking of a Way spirituality deepens and evolves over time.

研究分野：武道学

キーワード：武道 教育 東欧 精神性

### 1. 研究開始当初の背景

**キリスト教社会における武道による人間教育:**本研究は、人間教育に絶大な影響力をもってきたキリスト教文化圏である東欧において、日本の武道が代わって人格陶冶の役割を果たそうとする挑戦であり、国際開発としての意義は大きい。いまだ芽生え期の研究であるが、近年、日本側からのアプローチではなく東欧側から武道を人間教育に利用しようとする機運が生じている。

**心身二元論の世界における心身統合論の発信:**「武道の教育力」の中核をなすロジックは、「心」と「身体」をホリスティックに捉える心身統合(心身関係論)の思考をベースとするものである。本研究は、従来心身二元論を主たる思考形態とする東欧において、この心身統合の理論を発信しようとする挑戦である。この試みは、これまで研究代表者らにより徐々に進めてきているが緒に就いたばかりであり萌芽的段階にある。本研究のコンセプトは関係学会において先例がなく、学術的な意義は大きい。

**東欧の暗部へのアプローチ:**本プロジェクトは、民族紛争による精神的障害といった、通常目を背けがちな東欧の暗部にアプローチしようとするもので、至って挑戦的な試みであり、国際開発としての意義は大きい。

### 2. 研究の目的

本研究は、東欧における民族紛争後の元兵士の精神的障害等といった未解決諸問題に対して、武道の教育力が貢献できるかを検証し、その成果を一般化して東欧社会に還元することを目的とする。

### 3. 研究の方法

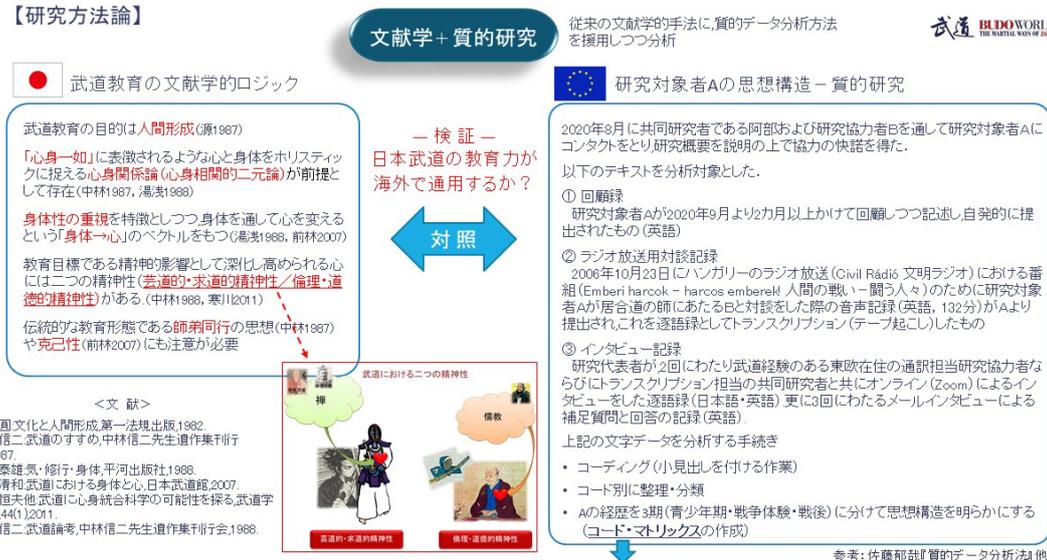
(1) **現代日本における武道教育のロジックを整理する:**源了圓(1987)、中林信二(1987)、湯浅泰雄(1988)、前林清和(2007)、寒川恒夫(2011)ら主な先行研究を対象とし、日本の学会に提出されてきた武道教育論、心法論等に関するロジックを整理する。

(2) **東欧における未解決問題と対象者の把握:**東欧における民族紛争後の元兵士の精神的障害について、Forum for Budo Culture(NPO, Hungary)の協力を得ながら、旧ユーゴスラビア諸国について現状と対象者の実態を把握する。

(3) **東欧における武道教育の可能性について検証:**日本の武道教育におけるロジックと東欧における事例を照合し、東欧における武道教育の可能性について検証する。

(4) **研究成果の発信:**研究代表者が主催する「武道ワールド・プロジェクト」により研究成果を発信する。

#### 【研究方法論】



### 4. 研究成果

(1) 日本の武道教育において、以下のロジックが明らかとなった。

- 武道教育の目的は人間形成である。(源 1987)
- 「心身一如」に表徴されるような心と身体をホリスティックに捉える心身関係論(心身相関的二元論)が前提として存在する。(中林 1987, 湯浅 1988)
- 身体性の重視を特徴としつつ、身体を通して心を変えるという「身体→心」のベクトルをもつものである。(湯浅 1988, 前林 2007)
- 教育目標である精神的影響として深化し高められる心には二つの精神性(芸道的・求道的精

神性／倫理・道徳的精神性)がある。(中林 1988, 寒川 2011)

- 伝統的な教育形態である師弟同行の思想 (中林 1987) や克己性 (前林 2007) にも注意が必要である。
  - (2) ユーゴスラビア紛争時における元兵士Aの事例を調査・分析し、以下の事項が明らかとなった。
    - Aが武道に精神の癒しを求めたのには、武道を明確にスポーツと区別し、そこに何らかの「深み」を感じていたからである。その「深み」の正体は、実戦性(殺傷性)から礼や道場という場が大いに関係しつつ実現する人間形成へと、時間の経過に伴いその認識が変化してきた。
    - Aの武道実践つまり修練方法の特徴は、何といても鍛練主義的な反復練習であり、この方法によって心にアプローチする。ここには明らかに武道学でいうところの身体性重視の思想が見て取れ、更に身体を通して心を変える「身体→心」のベクトルが確認できる。これは武道教育の根幹をなすロジックである。ここには「心身一如」に表徴されるような心と身体をホリスティックに捉える心身関係論(心身相関的二元論)が前提として存在する。
    - 更に、Aは師であるBに対する感謝の気持ちを随所で語っているが、Bもまた同じく修行者でありAを伴って日本在住のC師範のもとに通っており、ここには「師弟同行」の姿勢が見て取れる。
    - 又、稽古環境や地理的条件もあって、Aの修練は、長時間「切り下ろし」を黙々と行うような独り稽古が主であり、師の導きに頼ることはできず、必然的に自らの気づきによる「克己性」が強かったといえる。
    - 次に精神的影響について考察すると、大きく二つに大別できる。一つは、Aが稽古の目的は反復練習により自らの邪念を滅ぼすことだと述べているような、武道の場面における個人の修行過程やそれにより得られた境地に関する精神のことで、武道学のロジックでいう「芸道的・求道的精神性」にあたる。二つ目は、Aが最終的には倫理性や道徳性を高めていくことが武道の意味だと述べているような、直接技術と係わらない他人との人間関係つまり社会性を有する精神で、武道学のロジックでいう「倫理・道徳的精神性」にあたる。
  - (3) 上記、日本の武道教育におけるロジックと東欧における事例を照合した結果、正常な状態ではなく戦争体験による精神障害という至ってマイナスの状況下で、精神的影響つまり癒しを強く必要とした本事例においても、日本において先学が提示した学説に近い形で、武道実践により人間性を回復していたことが確認された。
- つまり、武道学における武道教育のロジックは海外においても有効に機能している、つまり“日本武道の教育力は海外で通用する”ことが明らかとなった。

### 【考察】



 ここまでユーゴスラビア紛争時の元兵士であるAについて、スナイパーとして闘った戦時中の狙撃による殺人や生死の境を経験したことに加え、戦後の一般社会からの疎外感等から、睡眠障害や無夢ひいては自殺未遂にいたる精神障害を引き起こしこれを武道により克服した過程を明らかにしてきた。

本論の主題は、戦後の精神障害の克服つまり武道による精神の癒しにあるがこれを武道学のロジックに照らして考察をする。

#### ● 武道教育の文献学的ロジック

武道教育の目的は人間形成(原1987)

「心身一如」に表徴されるような心と身体をホリスティックに捉える心身関係論(心身相関的二元論)が前提として存在(中林1987, 湯浅1988)

身体性の重視を特徴としつつ身体を通して心を変えるという「身体→心」のベクトルをもつ(湯浅1988, 前林2007)

教育目標である精神的影响として深化し高められる心には二つの精神性(芸道的・求道的精神性／倫理・道徳的精神性)がある(中林1988, 寒川2011)

伝統的な教育形態である師弟同行の思想(中林1987)や克己性(前林2007)にも注意が必要



Aが武道に精神の癒しを求めたのには、武道を明確にスポーツと区別し、そこに何らかの「深み」を感じていたからである。その「深み」の正体は、実戦性(殺傷性)から礼や道場という場が大いに関係しつつ実現する人間形成へと時間の経過に伴いその認識が変化してきた。

Aの武道実践つまり修練方法の特徴は、何といても鍛練主義的な反復練習であり、この方法によって心にアプローチする。ここには明らかに武道学でいうところの身体性重視の思想が見て取れ、更に身体を通して心を変える「身体→心」のベクトルが確認できる。これは武道教育の根幹をなすロジックである。ここには「心身一如」に表徴されるような心と身体をホリスティックに捉える心身関係論(心身相関的二元論)が前提として存在する。

更に、Aは師であるBに対する感謝の気持ちを随所で語っているが、Bもまた同じく修行者でありAを伴って日本在住のC師範のもとに通っており、ここには「師弟同行」の姿勢が見て取れる。

又、稽古環境や地理的条件もあって、長時間「切り下ろし」を黙々と行うような独り稽古が主であり師の導きに頼ることはできず、必然的に自らの気づきによる「克己性」が強かったといえる。

次に精神的影響について考察すると、大きく二つに大別できる。一つは、Aが稽古の目的は反復練習により自らの邪念を滅ぼすことだと述べているような、武道の場面における個人の修行過程やそれにより得られた境地に関する精神のことで、武道学のロジックでいう「芸道的・求道的精神性」にあたる。二つ目は、Aが最終的には倫理性や道徳性を高めていくことが武道の意味だと述べているような、直接技術と係わらない他人との人間関係つまり社会性を有する精神で、武道学のロジックでいう「倫理・道徳的精神性」にあたる。

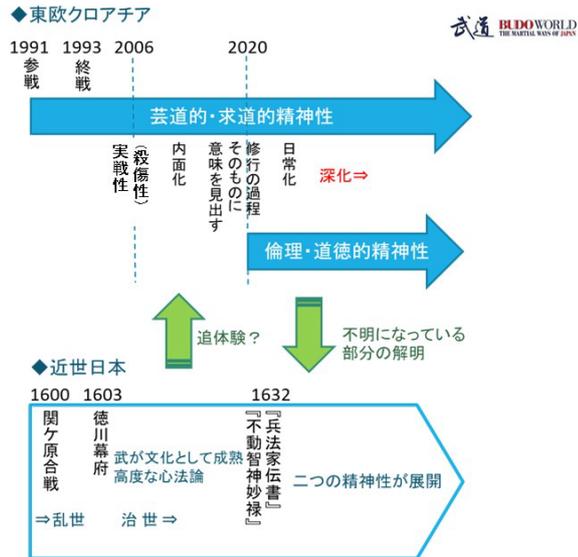
本研究成果は、海外において人間形成を担ってきたキリスト教の文化圏においてさえ武道による人間形成が可能であること、デカルト以来の心身二元論の世界においてもこの武道思想が機能していたことを明らかにした点で、学術的新規性が非常に高い。

また、本東欧の事例において修行が進むにつれ芸道的・求道的的精神性について倫理・道徳的精神性が顕現化する、あるいは芸道的・求道的的精神性の内容が深まり進化する様子は、敵と命のやり取りをした場面と時間的に近い立ち位置でこの過程・順序を追体験しているとも解され、ここには武道がそもそも殺傷性を目的とした戦いの術であったものが人間形成を目的とする教育へと深化していく過程を説明しうるものである。

◆精神的影響としての「芸道的・求道的精神性」と「倫理・道徳的精神性」

以上のように修行が進むにつれ「芸道的・求道的精神性」について「倫理・道徳的精神性」が顕現化する。あるいは「芸道的・求道的精神性」の内容が深まり進化する様子は、そもそも日本において戦国乱世から治世に移行する近世期に我われ日本人が経験してきたことと考えられる。

従来の武道学では、このことにあまり注目してきてはいない。Aの事例は、敵と命のやり取りをした場面と時間的に近い立ち位置で、この過程・順序を追体験しているとも解される。ここには武道がそもそも殺傷性を目的とした戦いの術であったものが、人間形成を目的とする教育へと深化していく過程が凝縮されていると言える。



【近年の研究活動】終わり

(4) 本研究成果を、以下の方法で発信した

① 武道学研究および身体運動文化研究に論文として投稿した。(掲載済み)

酒井利信・阿部哲史・二宮恭子・堀川峻：東欧における武道の教育力に関する研究：ユーゴスラビア紛争時における元兵士の事例を中心に。武道学研究，54(2)，125-139，2022.3

Toshinobu SAKAI, Tetsushi ABE, Kyoko NINOMIYA, Takeshi HORIKAWA: Research into the educational power of budo in Eastern Europe: A focus on a former soldier from the Yugoslavia Conflict (Secondary publication). Research Journal of Physical Arts, 28-1, 11-28, 2023.3

② バイリンガル・ウェブサイト「武道ワールド」において発信した。

—第20回武道ワールド・セミナー—

[https://budo-](https://budo-world.taiku.tsukuba.ac.jp/2022/09/08/%e7%ac%ac20%e5%9b%9e%e6%ad%a6%e9%81%93%e3%83%af%e3%83%bc%e3%83%ab%e3%83%89%e3%83%bb%e3%82%bb%e3%83%9f%e3%83%8a%e3%83%bc/)

[world.taiku.tsukuba.ac.jp/2022/09/08/%e7%ac%ac20%e5%9b%9e%e6%ad%a6%e9%81%93%e3%83%af%e3%83%bc%e3%83%ab%e3%83%89%e3%83%bb%e3%82%bb%e3%83%9f%e3%83%8a%e3%83%bc/](https://budo-world.taiku.tsukuba.ac.jp/2022/09/08/%e7%ac%ac20%e5%9b%9e%e6%ad%a6%e9%81%93%e3%83%af%e3%83%bc%e3%83%ab%e3%83%89%e3%83%bb%e3%82%bb%e3%83%9f%e3%83%8a%e3%83%bc/)

③ 本研究により、「武道の教育力」には、「実践を通じた精神面の成長」つまり“武道の身体的な修練を通して人として立派な心（精神）を育む”といった「身体→心」のベクトルにみる心身統合的なロジックが根底にあることが立証されたが、これを一般化し、実技実践現場においてセミナーを開催して Example (見本) を明示した。

—武道ワールド・プロジェクト：武道教育セミナー—



↑ジュニア武道セミナー  
於：筑波大学  
参加者：ジュニア 8名、  
指導者 4名 計 12名

←Euro Budo Academy  
於：ルーマニア  
参加者：ルーマニア人 34名  
日本人スタッフ 7名

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 4件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 Toshinobu SAKAI, Tetsushi ABE, Kyoko NINOMIYA, Takeshi HORIKAWA	4. 巻 28
2. 論文標題 Research into the educational power of budo in Eastern Europe:A focus on a former soldier from the Yugoslavia Conflict	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Research Journal of Physical Arts	6. 最初と最後の頁 11-28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 酒井利信・阿部哲史・二宮恭子・堀川峻	4. 巻 54-2
2. 論文標題 東欧における武道の教育力に関する研究：ユーゴスラビア紛争時における元兵士の事例を中心に	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 武道学研究	6. 最初と最後の頁 125-139
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.11214/budo.2112	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 堀川峻・酒井利信・大石純子	4. 巻 54-1
2. 論文標題 近代初頭の武士道思想に関する一考察：「武士道の淵源」と「武士道と倫理・道徳」に着目して	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 武道学研究	6. 最初と最後の頁 15-27
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.11214/budo.2105	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 二宮恭子・酒井利信・大石純子・堀川峻	4. 巻 26
2. 論文標題 剣術における神道的宗教性に関する一考察 - 新当流を中心に -	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 身体運動文化研究	6. 最初と最後の頁 43-66
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計20件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 堀川峻・酒井利信・大石純子
2. 発表標題 近代期の武士道論者にみられる武道観に関する一考察
3. 学会等名 日本武道学会第55回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 酒井利信
2. 発表標題 武道学における精神文化史研究 序説 研究方法論の探究
3. 学会等名 日本武道学会第55回大会剣道専門分科会企画講演会（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 堀川峻・酒井利信・大石純子・幕田熙
2. 発表標題 明治期における武士道思想に関する一考察 - 勝海舟に着目して
3. 学会等名 身体運動文化学会第27回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 柴田直生・酒井利信・大石純子
2. 発表標題 ドン・ドレガーの武道観に関する研究 - 「武道」関連用語の用例分析を通じて
3. 学会等名 身体運動文化学会第27回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 筒井雄大・酒井利信・大石純子・森山竜成
2. 発表標題 大日本武徳会における武道の教育的価値に関する一考察 - 武徳学校の設立に着目して
3. 学会等名 身体運動文化学会第27回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 酒井利信・阿部哲史・二宮恭子・堀川峻
2. 発表標題 東欧における武道の教育力に関する研究
3. 学会等名 日本武道学会第54回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 筒井雄大・酒井利信・大石純子
2. 発表標題 大日本武徳会における渡辺昇に関する一考察
3. 学会等名 日本武道学会第54回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 堀川峻・酒井利信・大石純子
2. 発表標題 近代における武士道思想に関する一考察 - 井上哲次郎に着目して -
3. 学会等名 日本武道学会第54回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 酒井利信・阿部哲史・二宮恭子・堀川峻・筒井雄大
2. 発表標題 日欧対話による国際的「生涯武道論」の構築について
3. 学会等名 身体運動文化学会第26回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 堀川峻・酒井利信・大石純子
2. 発表標題 明治期の「武道」概念に関する一考察 - 武士道としての語義に着目して -
3. 学会等名 身体運動文化学会第26回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 田嶋結・酒井利信・大石純子
2. 発表標題 外国人の日本論にみられる武道に関する一考察 明治時代に着目して
3. 学会等名 日本武道学会第53回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 堀川峻・酒井利信・大石純子
2. 発表標題 近代以降の武道書にみられる武士道思想に関する一考察
3. 学会等名 日本武道学会第53回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 二宮恭子・酒井利信・大石純子
2. 発表標題 新当流における宗教性について 『兵法自観照』にみられる神々に注目して
3. 学会等名 日本武道学会第53回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 堀川峻・酒井利信・大石純子
2. 発表標題 近代における武士道思想に関する一考察 - 明治20年代の内藤耻叟・松本愛重・重野安繹に着目して
3. 学会等名 身体運動文化学会創立25周年記念国際大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 柴田直生・酒井利信・大石純子
2. 発表標題 東欧における武道の教育力に関する研究 - ルーマニアの武道実践者を対象として
3. 学会等名 日本武道学会第56回大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 森山竜成・酒井利信・大石純
2. 発表標題 新当流における「気」に関する研究 - 『兵法自観照』に着目して
3. 学会等名 日本武道学会第56回大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 幕田熙・酒井利信・大石純子
2. 発表標題 明治期前半にける武道教育に関する研究 - 教育雑誌に着目して
3. 学会等名 日本武道学会第56回大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 寒川祥・酒井利信・大石純子
2. 発表標題 伏斎禎山の思想形成に関する一考察 - 熊沢蕃山からの影響に着目して -
3. 学会等名 身体運動文化学会第28回大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 筒井雄大・酒井利信・大石純子
2. 発表標題 大日本武徳会における武術教育に関する一考察 - 青年教育に着目して -
3. 学会等名 身体運動文化学会第28回大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 堀川峻・酒井利信・大石純子
2. 発表標題 20世紀初頭における武士道論に関する一考察
3. 学会等名 身体運動文化学会第28回大会
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

武道ワールド <a href="https://budo-world.taiiku.tsukuba.ac.jp/">https://budo-world.taiiku.tsukuba.ac.jp/</a> Budo World <a href="https://budo-world.taiiku.tsukuba.ac.jp/">https://budo-world.taiiku.tsukuba.ac.jp/</a> Budo World <a href="https://budo-world.taiiku.tsukuba.ac.jp/">https://budo-world.taiiku.tsukuba.ac.jp/</a>
---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------